

モード Mode Mode は語る 美しく光を乱反射、ドレスにも

中野 香織

「絣絹（しげぎぬ）」という絹織物がある。2頭の蚕が共同で1つの繭にした「玉繭（たままゆ）」から紡がれる糸から作られる。節があるため「くず糸」とされた糸が逆に希少とみなされ、富山県南砺市城端（じょうはな）で450年ほど前に生産され始めた。

薄く透ける特性を活かし、和紙と貼り合わせて襖（ふすま）紙や壁紙、ランプシェードなどインテリアに使われてきた。糸の節がかえって独特の味わいとなり、高級感を醸し出す。

現在も絣絹の生産を続ける松井機



高松太一郎氏が製作した絣絹のドレス

業を訪ねた。1877年（明治10年）創業で、富山県で絹織物を製造する最後の会社となった。現在の社長は6

絣絹の可能性広げる

代目の松井紀子さん。東京の証券会社に勤めていたが、父の東京営業に同行した際に家業の可能性に目覚め、2010年にUターン。絣絹のブランド化に着手した。

絣絹の魅力を語る松井さんは詩人になる。節のある糸が走る機械を眺め、「2頭のお蚕さんが生んだ愛の結晶が、まるで流れ星のように見えませんか？」と語る。また糸を紡ぐ前に繭を熱湯に漬ける時の悲しみをこんな風に表現する。「お蚕さんは天に上り、絹糸はお蚕さんの命と引き換えに生まれます。だからこそ、

絹には命の輝きが宿るのです」

絹織物や蚕を愛するあまり、桑畑を作り、養蚕業も手掛け始めた。絹織物は地球からの贈り物であると熱く語る。同時に冷徹なビジネス戦略をもって、天然の紫外線カット効果をうたう絣絹の日傘やショールも生産し、オンラインストアなどで販売している。

アパレルに持ち込んでも服には向かないと断られ続けていたが、富山にアトリエを構えたクチュールデザイナー、高松太一郎氏が高度な技術でドレスを創り上げた。「張りのある透け感があるうえ、光が柔らかく乱反射する」と高松さんは語る。絣絹とオートクチュール。コラボの結晶が天の川のようにも見えてくる。